

史料紹介

長田浦聖神社の由来

～東上浦村誌より～



聖神社本殿

昨年九月、長田地区の聖神社を訪問した。其の時の神社の謂れに興味を持ち資料を収集した。この資料は、「東上浦村誌」に伝承として載せられておりました。提供者は森崎浩治さんです。その文を紹介する。

享和三年（一八〇三）五月、佐伯藩より幕府に提供したる「佐伯莊郷村假名附帳」に郡内二十六ヶ村の一なる上浦の枝郷浅海井浦の内に丸碓、浪太あり。同枝郷古江浦の内に長田浦あり。丸碓、浪太は浅海井浦と地域を接したるをもつて、これを属地と為したるは異しむに足らざるも、古江浦より二里あまりも東北に隔離せる長田浦を古江浦の内と称するに至りては、誰かその理由を訝し混ざる者あらん。而して此の疑問を解決せるものは、聖神社の由来記なり。長田浦の古老がその地に伝わる口碑なりとて語る所によれば、事の顛末左の如し。いつの頃の事なるか、年代祥ならざるも、この地下に人家のまだ十幾戸しか無かりし時、頭陀袋を背負いる一人の僧来たり、道尻田の上なる要助畑に一棟の草舎を結び、そこに住居して晨昏仏名を称え毎日筵を打ちてこれを販ぎ生活をなし居りたるが、売り

たる代の追々溜まりて今は相應の金持ちに成りたる時、或る夜深更におよび、さらでも淋しきこの草舎に数名の凶漢襲い来たりて、てんでに鉄鎌を六尺棒等を携え、驚き怖れて逃げ回る僧を捕えけるに、僧は掌を合わせて凶漢等に対し、金は残らず差し上げるほどに命ばかりはお助けくだされと、声涙共に下りて詫びたりけるも、情けを知らざる凶漢等は、更にこれを聞き入れず散々に打撲して遂にはこれを惨殺し、その蓄え置きたる金子をば悉く皆盗み取りて分売し立ち去りたり。(今、長田浦道尻田付近に鎌セマチ、鎌ジリ、箱割等の字残れるは、当年僧を惨殺せし地に附させし名称なりという。)

僧の一命は斯くの如くして断たれ、その遺骸は荒涼一杯の土に遺棄せられたるも、残虐無法の終に含める僧の怨念、如何でか安んじて地下に瞑せんや。爾後、長田浦には微雨蕭々の夜、悲風凄の夕べ、陰火、青火焰を放ちて空中を飛び、鬼哭啾啾の声絶えざりしが、怪異は漸次威力を加え、村中奇病に罹りにわかに斃するもの多ければ村人等、大いに恐れを懷き、こわ全く前に殺されたる出家の怨霊村に祟りて恨みを酬いるに

違うまじ、躊躇して殃禍に罹らんより、速やかにこの地を立ち去り難を避けんには若じとて、村人残らず家を挙げて古江浦に移転したり。

その後若干の年月を得て、長田浦の怪異も今は全く鎮まれりと聞き、古江浦に避難したる長田村民は、長田に帰村したるなりと。

一説に怪異鎮まりたる後、長田浦に入りたるは、旧長田浦の住民のみならずして、他所よりも来たりという。すなわち川本一統は津久見村の枝郷奥河内より、藤田一統は阿波の国より、浅海は伊予の国日振より来たりたるなり。しかし中西一統は古江浦より帰りたる家なり。よつて長田の地下は再び人家建て揃い、渡世向きも以前と変わる事なきにいたれば、村民協議して無残の死を遂げたる僧の為、その亡霊を神に祝ひ祀りて当浦鎮めの社となさんことを議決し、社地を現時の聖谷に択び、神殿を造営し慰霊をここに鎮めて祭祀の典を行い、僧侶なるにより聖神社とは称え祀りたるなりと言う。

此の關係より由来、古江浦は長田を以て、我が所の人民が移住せし土地なるが如く心得、藩の人別帳また

《上浦町誌における聖神社》

聖神社

所在地

佐伯市上蒲最勝海浦長田聖谷

三六五四番地

祭神

菅原道真 事代主命

例祭日

月十二日 十月十五日

事柄

明治六年村社となる。

明治十七年九月敷場の事代主命を

合祀。

享和三年奉納の花崗岩製の鳥居あり

文久三年の社殿建築の棟札あり

氏子数六十一戸

浦の支屬地なるが如く取り扱いたるは不当なり。

さて、長田浦にて僧を殺したるは、いつの時代の事なるか、漠として知るべからざるも、怪異鎮まりたる後、此処に移住したる浅海というは伊予の日振の産にて、船乗りを業となし、征韓の役水夫として従事し渡海中、潮勢により日本国に朝鮮国との境界を弁明したるにより、賞として浅海の氏を賜れる由なり。よりて僧の惨殺事件は文禄以前の事たりしや知るべし。

長田浦に浅海の氏九戸ありしも、前年七戸北海道へ移住して今は二戸ありという。